

ジンバブエと野球

楠 活也

一九九九年十二月六日、私は成田空港にいました。当時、二十二才。私の人生はじめての国外進出でした。行き先は、アフリカのジンバブエ。青年海外協力隊の隊員として行く事になったのです。職種は、野球指導。異国の地で、野球の指導者として、二年間、活動することになったのです。私が配属された町は、ブラワヨというジンバブエ第二の都市でした。人口約五十万人。アフリカといっても、裸に、腰巻をつけ、槍を持って、街中をうろろしている所ではないのです。キリンや象がその辺から出てくるわけでもなく、道はアスファルトで、ビルやカフェが立ち並んでいるところもあるし、街中には、スーツを着ている人もいれば、Tシャツにジーパンの人もいるし、又、ぼろぼろの服を着た浮浪者もいれば、物乞いをするストリートチルドレンもいました。いわゆる、日本人がイメージする「アフリカ」とは、かけ離れているのです。



ジンバブエ・ベースボール
ナショナルチーム(2001年12月)

配属先は、教育省スポーツ文化局のブラワヨ支部でした。そのスポーツ担当の人の下で活動をするのです。しかし、その一番偉い人でも、野球のことは、ほとんど知られなかったので、全てを任せられたのです。各学校の校長先生や野球担当の先生に物申す立場にいたのです。今思えば、こんな私が、なんと指導者の立場に居たのですね。

私の主な活動は、小・中・高校への巡回指導でした。各学校へ出かけて野球を指導するのです。グローブ約十五個、軟式ボール十個、金属バット二本、カーペットでできたベース一セット、キャッチャーマスク、それ

を払うなんてありえないのです。実際、交通費が払えない理由で参加できなかつた学校やチーム、開催できなかつた大会はたくさんあつたのです。

そんなことを考えていると、この国に野球は必要なのだろうか。私はなんのためにこの国へきたのだろうか。野球をする事で、選手達やその家族を苦しめているのではないかと、悩んでしまいました。青年海外協力隊として、ボランティアとしてこの国へきたのですから何かこのジンバブエという国の役に立ちたいという思いはあるのですがその思いが、根底から覆されているようでした。

日本への帰国が近まつてきた二〇〇二年八月頃でした。『クロスワード』という青年海外協力隊の月刊誌が届きました。そこには、ブラワヨのスポーツ隊員の特集記事があり、その最後に、このような文章がありました。

「未だ、国際協力の関係者の中には、「貧困で困っている人たちに、なぜ、スポーツなの?」という疑問を抱く人びともいる。それらの人びとに、ジンバブエ人のこの言葉を送りたい。「Our life is not easy, but we still need fun!」(私たちの生活は確かに苦しい、それでも、私たちにも楽しいことは必要です!)」

この部分を読んだ時、私の心の中の曇りが晴れた気がしました。ジンバブエで野球をし、上達して、プロ野球選手になる。現段階では、そのようなことは考えられません。しかし、私は、野球というスポーツを通して、たくさんの人と出会うことができ、友達ができました。ジンバブエの人達にも、たくさんの友達ができ、中には、野球選手とソフトボール選手で恋人になるということもありました。なにより、貧しい生活の中で一つの楽しみを得られる場として、野球があつたればこそその成果ではなかつたでしょうか。

そこで、私には、野球しかなかつたのです。農業や医療面で貢献する事は、確かに、開発途上国であるジンバブエには必要です。しかし、私にはできません。私にできたことは何なのか、それは、野球を伝えることだけだつたのです。野球をして、みんなで一緒に楽しむだけだつたのです。それだけだつたのです。

ジンバブエから帰国して七年以上が経過しました。そして今、私にできることは何なのだろうか。私がすべき事は何なのだろうか、今一度、自分を見つめなおしています。

(長崎・光源寺光こども会主事)

らを背中に背負つて各学校を回るのです。三時以降は、会議や現地産道具の開発の時間にあて、週末はクラブチームの指導にあたりました。

ジンバブエでの野球の指導は、なかなか面白く、日本では、冗談にもしないようなことが平気で起こるのです。例えば、バットを持つ手を、反対に持ち、グローブも投げるほうの手につけることも当たり前でした。打つた後に、三塁ベースの方へ走る子もいました。簡単なことのように思えますが、何度教えてもなかなかできないのです。しかし、アウトや、点を取る、試合に勝つ、といった時は、飛び跳ねて大喜びするのです。ルールも殆んどわかつていないのに、喜びを素直に表現するその姿は、日本人には欠けている部分のようにも思うし、喜ぶ姿を見るのはうれしいものでした。しかし、うれしいと常に思っていたわけではないのです。野球部員は、多いときで五名でした。その他にも、ソフトボールや体育隊員なども野球の指導を援助してくれました。時々、それら指導者が集まつて、野球やソフトボールのミーティングが開かれ、それぞれの活動報告、各地での成果、問題点などを出し合つて、今後の対策を練るのです。

そこで、必ず出てくる問題が、資金不足でした。我々、野球に携わっていた隊員の共通の思いは、日本人がいなくなつた後でも、現地の人達だけで野球を続けていけるようにするには、どうするかと言うことでした。しかし之は、なかなか難しい問題でした。しかしそんな中ルールや技術を伝えることは、それなりに成功していたと思います。

資金不足については、どうしようもありませんでした。国全体が貧しく、経済も悪化傾向にあり、道具を買うにもお金がかかる。大会を開催するにも、交通費や食費がかかる。それらは、自分で払うか、学校が払うかなのですが、学校にもお金がない。そんな状況の中で私たちは、道具を購入してくれ、大会があるから、交通費と食費を払つて参加して、「と言わなければならなかつたのです。選手の親や家族からしてみれば、自分達の生活だけでも苦しいのに、野球という、不可解なスポーツにお金

風信

○今月は何と言つても北朝鮮の問題が私には強心に残つた。原爆の悲惨さを深く知る私達にとつて、驚きという一言では言いつくせぬものがあり、悲しかった。

○五月二十六日長崎新聞の「空や水」にイソップを引いて「みせかけ蛙の結末」の事が記してあつた。人もあまり夢中になつて宣伝しすぎると反つて蛙のように腹が破れてしまうのであるという。最近の長崎の観光宣伝、何か思い当る事ありませんか!

○十八銀行長崎経済研究所「ながさき経済」六月号によると、本県経済概況は、造船大手・中堅高操業続き、企業倒産件数は小康とある。但し個人消費・観光・雇用求人面は悪化とあつた。

○明治以後、現在の長崎では六月一日を更衣の日とし、又「長崎くんち」小屋入りの日としているが昔は更衣は旧暦四月一日とあり、現在暦では四月二十五日が其の日に当る。「くんちの小屋入り」についても旧六月に入り梅雨の降らぬ良呂敷日を選び各踊町・各自で諏訪社に出かけ「御祓を受けたり」とある。今年の暦をみると旧六月一日は七月二十二日で梅雨もどうにか上がった時である。昔の小屋入りは之の梅雨あけの日に合わせたのでありましよう。

○この時、隣人が私に言う「時代は変わったのですよ、昔とは違ふんですから、しっかりと現代に合わせなさい」と。
○変つたと言えば、地球温暖化の問題が最近また大きく取りあげられていますね。私達も他人ごとと思わず、小さい事であっても私達の出来ることでも協力してあげましようよ。

○純心大学博物館古文書会では六月より新しく「初心者用・古文書を学ぶ会」を越中哲也先生を中心に再び開始したので御参加下さいとの事。毎月第二・第四火曜午前十時より正后まで。会場・純心高校内江角記念館(会費・年二、〇〇〇円) 自由参加・連絡―純心大学博物館・松田まで(電八四六―〇一〇二)

○山口広助氏より「丸山歴史散歩」の第二集として今回は「花街風俗話」を中心に編集しましたと報告あり、昨日同書を戴いた。私には同書の芝屋場・杉本屋の話がなつかしかった。(料亭・青柳刊、一〇五〇円)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一―五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

